平成 18 年 8 月号　№ 358

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
なかま編集係
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

2 ページ　フランネル物語 …… 清澤　瞳子　　身辺雑記　桃山の斑唐津盃 …… 富原　敏光
3 ページ　数字で遊んで …… 加瀬　清子　　小さな命を大切に …… 嶋田　孝弘

臍の緒

宮崎　常子

娘が、十一ヶ月の子供を連れて私のところに里帰りしている。この娘が昨年、フランス、パリの某産院で男児を出産しました。

その前に常常「赤ちゃんのお臍が枯れて、とれたら大切に保存し、その子が成長した時に渡してあげる風習が日本にはある」と話していたのです。けれども娘も初めてのこと、どのように枯れてとれるのか解らず、お産の際に医師に、「日本では臍の緒を、記念にとっておくのでください」と、お願いしたのだそうです。

フランス人の娘の夫が、出産に立ち会い、無事に産れた赤児を見て、顔を紅潮させ、私のところへ「ウマレタ、カワイイ」と報告に来ました。その時「コレオ」と言って私の手に渡された物は、白くフニャフニャした、ちょうど魚の白子のような生生しい物が大人の親指ほどの容器に入っている。

私は、それを見て驚き「これは何？」と聞きましたところ「ヘソ」と答えたのです。そうなんです。これは生の臍の緒なのです。（胎児のとき母体から栄養補給するための器官、臍帯）外国でのことですから、このような話にもなるのですね。

看護師さんは、「こんな気持悪い物、どうするの？」と言われたそうです。日本人ってこうゆう物を保存するのかと思われたのではないでしょうか。

今この生の臍の緒は、娘の家の冷凍庫の中で固っています。本物の臍の緒は、黒い小さな固りとなり、赤児の身体からきれいに取れました。その児も、順調に成長して九月には一歳の誕生日を迎える。

母親の身体から産れでて、すぐに産声を上げ、同時に、自身の力で肺呼吸をする。小さく胸が波打ち、生きる素晴らしさを感じさせてくれる。そして人間社会の一員として成長していく。

この幼な児の愛らしい顔、成長と共に見せてくれる、知恵や、振舞い、こんな楽しみなことはない。

この幼い子供達を、いかに大切に守って育てなければならないか、事件、事故、あまりにも子供達の生活が危険であることに心が痛む。

人が、社会が、国がこの子供たちを守らなくてはならないと思う。社会が、国が、すこやかに育つ環境をつくらなくてはならないと思うのです。

七月、八月、この夏休みを親子で楽しい思い出を沢山つくってほしいと願っています。

（編集委員）

フランネル物語

お向かいの彼女（七十五歳位）との朝の挨拶は「鶯が鳴きはじめましたね」「燕が来ましたね」と季節の到来の確認。

「このピンクの花の名前が判りますか」と、早速季節別、色別、牧野植物図鑑等かかえ込み、楽しい時を過ごす。

パープルがかった濃いピンクの鮮やかな花が、綿毛を密生させ銀色に輝く。ふあふあしたいい感触から「フランネル草」と呼ばれていることを知る、よく見かけている花だ。

フランネルとは、起毛した布地で、フラノの語源ともなっていることも判った。

彼女の田舎では、昔、フランネルのお腰巻きがあり、あたたかく、色柄も豊富だったとのこと。

ある日、友人に誘われ、城址公園の菖蒲園を見に行った。白、紫、黄と手入れの行き届いた田に見事に咲いている。年年花数も増え、バスで見学の方々もいる、写真、スケッチ、歌を詠む方と様様、その菖蒲田の奥に大樹で枝に紫の小花を集めて咲かせている珍らしい木があった、近づくと「せんだん」と表記されていた。その足元の水路の端に、フランネル草の赤と白とが咲いていた、いつも赤を見ているが白を見たのは初めて。

帰宅して早速、お向いさんに、せんだんの大樹をみたことや、フランネルの白を見たことを話した。

「フランネルはね、白だけでなく、いろいろの色があり、柄ものもあるのよ」

「えっ」「？　？」

しばらく間をおいて二人で大笑い、フランネルとフランネル草との違い、私は花を、彼女は遠い昔のフランネルを、草を略して言ってしまったことでの大爆笑。

（井野　清澤　瞳子）

身辺雑記
桃山の斑唐津盃（まだらからつはい）

声を掛けて、庭木戸から入ると、天池さんの奥さんが直ぐに気付いて心易い微笑を広げた。春の庭に木漏れ日が雉の羽のようにきらきらしている。奥さんが忍びやかな声で、お約束の日で御座いましたね。主人は煙草を買いに出ましたが、追っ付け戻る頃合いです。と穏やかな顔で言い、紀州、根来寺の朱塗りの盆に茶器を添えてきた。数奇屋ふうの家屋の縁側で、お茶を啜っていると、中庭の若竹の群れから風が渡り、奥さんの切れ長の目がそよぐ。

古美術商の主人は何時の間にか帰宅していて座敷から、さあ、此方へ、と呼んでいる。対座すると、先日電話した桃山時代の斑唐津盃を御覧に入れようと言い、着流しの袂から慎重に取り出して、入手の経緯を語った。神奈川県鵠沼の友人宅で快気祝いがあり、乾杯の時に自慢の盃が色々と出たので、各自が好みの盃を選び日本酒で祝う。やがて和気藹藹の宴会になり、気っ風のいい人が病の源は古陶の盃であるから、本日集まった皆さんが盃を一個ずつ貰って帰りましょう。と唱え、何故か忽ち叶ったと述べる。私は、その斑唐津の盃を手に受けた。楢の木の新芽のように銀色で、呼び継ぎが施されているので古武士のように無骨で頼もしい。桃山時代に日本の文化を支えた俵屋宗達、本阿弥光悦、千利休の人人と、時を共にした盃だと思うと、胸の芯の辺りが自然と熱くなり購う決断をして、如何程ですかと尋ねると、主人は風貌を綻ばせ、半ば強制的に分捕った盃に銭など不要と答え、眩しげな目で少し誇る風に笑った。

（中志津　富原　敏光）

数字で遊んで

途中から耳にしたテレビの声に、早早に流し元を切りあげ、計算器を手に座りました。

記憶に従って、先ず「4」を三桁に並べ「37」で割りました。綺麗に割り切れました。

興味津津、続いて「1」から「9」までの数字を三桁に並べ、それぞれを「37」で割っていきました。思いの外、割り切れたのです。

計算器の数字を押しながら、気付いたことがありました。数値が「3」の倍数ではないかしら……と。

かくなる上は、筆算するに如かず、とばかり鉛筆を走らせたのです。

思った通り、数値は「3」の倍数……即ち九九の「3の算」でした。

尚、仔細に見ますと、数値は、三桁の一の位の三倍であり、三桁の数字の和にも等しいのです。

面白くなった私は、更なる発展を期待して、三桁を六桁にしてみました。

紙の上に並べた六桁の数字を三桁に切り、一の位の上にその数字の三倍を記し、間にできた空間には「0」を書き入れて数値ができました。思いつきは成功でした。

但し、これら限られた数字にのみ、適応する簡易計算法でしかありません。

数学なるものから離れ、早くも六十数年が経ちました。久し振りに、計算器を離れた紙上の数字遊びに、楽しい一時を過ごしました。

私が耳にしたテレビは、恐らく三桁の同じ数字と「37」の関係を解説したことでしょう。残念ながら聞きもらしました。

若い日に「実生活は、小学四年程度の知識で十分」と聞いた言葉は、数学であったのかと、妙な納得をしました。

（臼井　加瀬　清子）

小さな生命を大切に

朝もやの中からカッコーの声が聞こえる。うぐいすもホトトギスも良い音色を聞かせてくれる。耳を澄ますと、キジのカン高い声も聞こえてくる。佐倉は良いところである。

隣家の庇の下でツバメの雛が三羽スクスクと育っている。良く見るとカップ麺の容器の中である。それは、心無い子供によって巣が叩き落されてしまったのだ。下に置かれていた雛に、親ツバメ二羽は心配そうに旋回していたが、雛たちはぐったりしたまま口を開けることもなかった。

そうこうしているうち、発泡スチロール製の巣が完成し、雛は戻された。果たして、親ツバメは子育てするのか心配になった。時が経って気づいたら雛の声が聞こえてきた。三つの白い三角の口が見えた。我がことのように嬉しくなった。

それにしても留守で鍵の掛かっていた家の門扉をこじあけ、一度は注意されやめたものの、再度棒を持ってきて巣を壊した小学生は、何を思ってやったのだろう。悲しいの一言に尽きる。ツバメにも命があることを、そして、弱いものは守ってやらなければいけないことを、知らないのだろうか。

元気になったツバメの親子を見て、なにか救われた気持ちになった。

間もなく巣立つであろう、この雛たちが、自然豊かな佐倉の空を元気に飛びまわり体力をつけ、南のかなたに飛び立ち、そして来年新しい家族と再び姿を見せてくれることを願っている。

（八幡台　嶋田　孝弘）

８月の黒板

★★★　『なかま』配布先一覧　★★★

『なかま』は以下の市内の施設で無料配布しています。

中央公民館　和田公民館　弥富公民館　根郷公民館　志津公民館　臼井公民館　佐倉図書館

志津図書館　志津図書館分館　佐倉南図書館　臼井公民館図書室　ヤングプラザ

ミレニアムセンター佐倉　志津コミュニティセンター　ミウズ　佐倉老幼の館　臼井老幼の館

老人福祉センター　西部保険福祉センター　社会福祉協議会臼井支会　サポートセンター

シルバー人材センター　佐倉郵便局　ＪＲ佐倉駅　京成佐倉駅　京成うすい駅

京成ユーカリが丘駅　京成志津駅　聖隷佐倉市民病院　老人憩いの家志津荘

『なかま』の２・３面は、市内の皆様の投稿によって作られています。原稿は随時募集しています。みなさまの投稿をお待ちしております

問い合わせ　　佐倉市立中央公民館　（第２・第４月曜日は休館日です）

URL　http://www.city.sakura.chiba.jp/kominkan/cyuuou/index.htm

さくら道

現在スポーツは大衆に好かれ、人気のあるものが多い。

ただ勝負が終ってからの行動が一寸気になるが、これは私が古い人間だからだろうか。

スポーツは勝負の世界だから、全力を尽くして相手に勝ったときは嬉しいに違いない。

しかし相手も全力を出しきったに違いないから悔しいことだろう。ただそれからの行動が気になる。最近での応援は外国人の影響もあるだろうが、派手過ぎるようだ。

日本の国技である相撲でさえ、勝った人の振舞は以前と大分異なり、多くの観客は、それを楽しみに来ているのだから仕方ないと思うが、私は負けた人だって勝とうと思って努力したのだから、その努力分を少しはみてやるべきと思うがどうであろう。スポーツとはそういうものではないのだろうか。

あとがき

中央教育審議会が、小学校高学年で英語を必修にするとの方針を出したことで論議を呼んでいます。必修化の背景には、英語コミュニケーション能力の育成が不可欠とする考えがあります。

今後、国際化がさらに進展して、国際語である英語を本当に必要とする日本人がどの程度増えるかということと、外国人と通訳なしで意思疎通できる英語力を身につけるための学習上の know-how の開発が問題になると思います。

いずれにしても日本語をしっかり身につけ、日本語、英語を問わず借り物でない自分のことばでコミュニケーションすることが大切です。

『なかま』の投稿文は、市民の方方が、ご自分のことばで綴られた作品です。多くの方方にお読み頂くようお勧め下さい。

（金井）